

認定看護師の研究成果活用の現状と学習状況との関係

宮首由美子¹ 亀岡智美²

1 自衛隊中央病院：〒154-0001 東京都世田谷区池尻1-2-24 2 国立看護大学校
miyakubiyumiko@gmail.com

The relations between the present condition and the learning conditions of the research utilization of Certified Nurse

Yumiko Miyakubi¹ Tomomi Kameoka²

1 Self-Defense Forces Central Hospital : 1-2-24 Ikejiri, Setagaya-ku, Tokyo, 〒154-0001, Japan 2 National College of Nursing, Japan

【Abstract】 The purpose of this study is to clarify the present condition of research utilization in nursing practice by Certified Nurses in Japan, and to explore the learning attributes of those who do so. One thousand and thirty one Certified Nurses in seven areas were asked to participate in the survey, and 524 agreed. A questionnaire was sent to them by postal mail. The questionnaire included items to examine the frequency of research utilization in everyday practice of nursing care and 12 learning attributes of the participants. Four hundred and seventy eight (91.2%) responded, and 470 valid data were analyzed. The results indicated that 285 (60.6%) Certified Nurses did not use research outcomes for their everyday practice of nursing care. In addition, out of 12 learning attributes, expertise of certified nursing care and ability of searching and reviewing literature were indicated to be related to the research utilization in their everyday practice of nursing care. As a result of the discussion, it was suggested that their expertise and ability of searching and reviewing literature would need to be improved in order to further research utilization in their everyday practice of nursing care.

【Keywords】 認定看護師 Certified Nurse, 研究成果の活用 research utilization

I. 緒言

看護学研究は、看護に関わる現象についての疑問に答え、問題を解決するために、組織だった科学的方法を用いて行う系統的探求である (Polit, D. F., et al., 2004, p.3)。また、研究成果は、看護を提供する時の根拠となり (Burns, N., et al., 2005/ 黒田ら訳, 2007, p.3)、研究成果の活用は、研究によって産出された知識を統合、普及、使用するプロセスである (Burns, N., et al., 2005/ 黒田ら訳, 2007, p.688)。そのような研究成果の活用は、看護の質向上に向けて必要である (舟島, 1995)。

日本看護協会は、1995年に認定看護師制度を発足させた。この制度は、特定の看護分野において、熟練した看護技術と知識を用い、水準の高い看護実践を行う能力を有する認定看護師を育成し、現場において活用することにより、看護の質向上を図ることを目的としている (日本看護協会, 2010)。看護の質向上を担う認定看護師には、根拠に基づいた看護実践が求められている (廣瀬, 2008)。前述したとおり、看護の質向上に向けては研究成果の活用が必要である。

先行研究 (清村ら, 2004; 望月, 1996; 尾形ら, 2002)

は、病院に就業する看護職者の研究成果活用状況とそれに関係する特性を探索していた。いずれの研究も、病院に就業する看護職者の20%から30%が研究成果を活用していないこと、学会参加回数や論文閲読状況、論文読解力が研究成果活用状況に関係することを明らかにした。しかし、国内の認定看護師に限定した研究成果活用の現状やそれに関係する特性を解明した研究は存在しない。また、海外において認定看護師の研究成果活用状況を明らかにした文献は見あたらなかった。

認定看護師が、根拠に基づいた質の高い看護を提供するためには、日頃の看護実践に研究成果を活用することが必要である。そこで、本研究は、日頃の看護実践への研究成果活用の現状や研究成果を活用している認定看護師の特性を解明する。本研究の成果は、研究成果の活用促進やその支援のための基礎資料となり、認定看護師個々の科学的根拠に基づく看護の提供に貢献する。

II. 研究目的

認定看護師による日頃の看護実践における研究成果活用の現状およびその学習状況との関係を解明し、認定看護師

による研究成果の活用促進に向けての課題を検討する。

Ⅲ. 用語の定義

1. 認定看護師

日本看護協会認定看護師認定審査に合格し、ある特定の看護分野において熟練した看護技術と知識を用い、水準の高い看護実践を行う能力を有すると認められた看護師である（日本看護協会，2010）。これを前提とし、本研究においては、認定看護師を「日本看護協会認定看護師認定審査に合格し、医療施設に就業している者」と規定する。なお、常勤・非常勤は問わない。

2. 研究成果の活用

研究によって産出された知識を統合、普及、使用するプロセスである（Burns, N., et al., 2005/ 黒田ら 訳, 2007,

p.688）。本研究においては、研究を通して明らかになった科学的知識を日頃の看護実践に活用することと規定する。

3. 学習

問題解決の1方法（森岡ら，2006，p.160）である。本研究においては、対象者が問題を発見したり解決したりするために取り組む手段や方法と規定する。

Ⅳ. 概念枠組み（図）

本研究は、認定看護師の日頃の看護実践における研究成果活用状況と学習状況との関係を探索する。先行研究（清村ら，2004；望月，1996；日本看護協会，2008b；尾形ら，2002）の検討は、認定看護師による研究成果活用状況に関係する可能性の高い12変数を含む概念枠組みを構築した。それは、認定看護師の学習に関連する状況に包含される

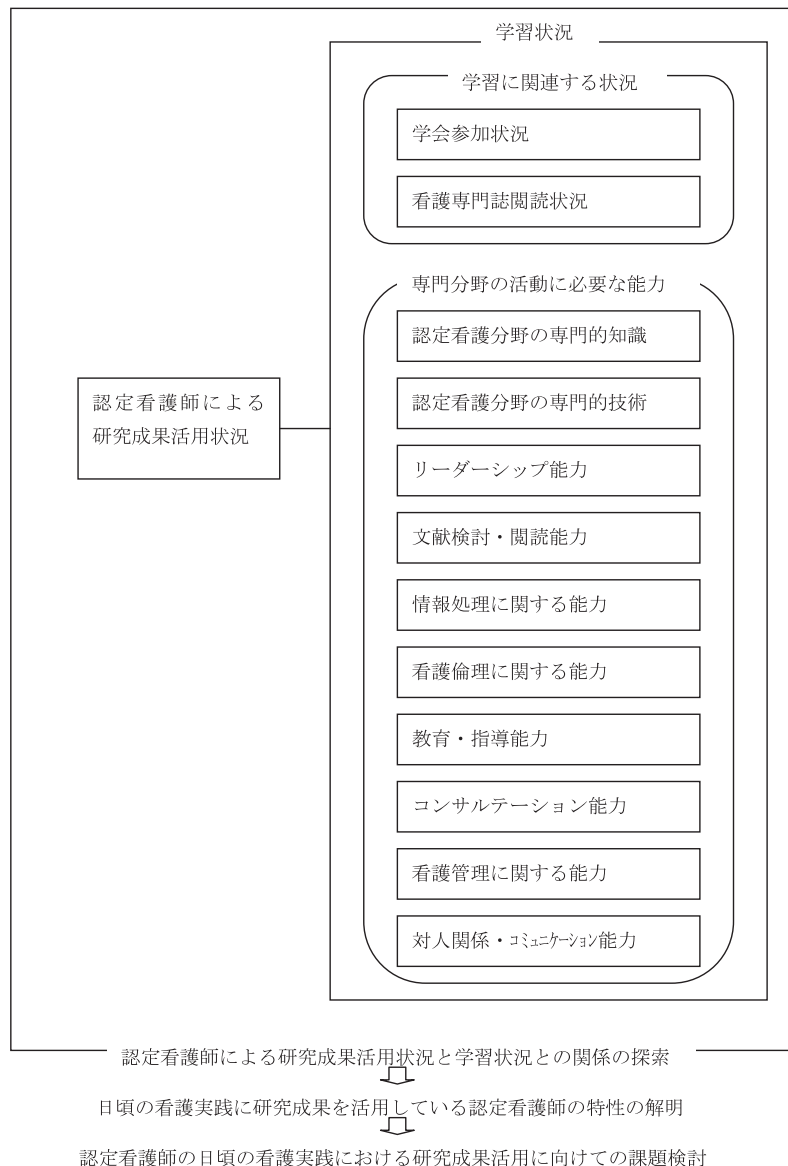


図 概念枠組み

「学会参加状況」等の2変数、専門分野の活動に必要な能力に包含される「認定看護分野の専門的知識」等の10変数から構成される。これら12変数は、認定看護師の学習状況に包含される。認定看護師による研究成果活用状況と学習状況との関係の探索は、日頃の看護実践に研究成果を活用している認定看護師の特性の解明に結びつき、認定看護師の日頃の看護実践における研究成果活用に向けての課題検討を可能にする。

V. 研究方法

1. 測定用具

研究目的の達成に向け、質問紙を作成した。認定看護師の研究成果活用状況を問う質問は、「日頃の看護実践に研究成果を活用していますか」であり、選択肢は「かなり活用している」、「わりに活用している」、「あまり活用していない」、「ほとんど活用していない」である。また、質問紙には、研究成果活用状況との関係を探る概念枠組みが包含する対象者の学習状況に関する12質問項目、および対象者の人口統計学特性を問う「認定看護分野」、「職位」、「所属施設」、「年齢」等の8質問項目を含む。内容的妥当性は、専門家会議とパイロットスタディにより確保した。

2. データ収集

2008年12月現在、日本看護協会に登録され、日本看護協会公式ホームページ（日本看護協会，2008a）において氏名、所属施設名を情報公開している17分野の認定看護師のうち、救急看護、皮膚・排泄ケア、集中ケア、がん性疼痛看護、緩和ケア、がん化学療法看護、感染管理の7分野の認定看護師を対象とした。これらは、登録されている認定看護師数が、200名を超えている分野である。登録されている認定看護師数が200名を下回る分野からの標本抽出は、対象者の匿名性の保持に課題を残すと判断した。

抽出した認定看護師のうち、対象者の転属や退職による宛先不明者を除く1,031名に往復葉書により研究協力を依頼した。その結果、524名から承諾を得、郵送法を用いて、前述した質問紙を配布、回収した。データ収集期間は、2009年3月から同年5月であった。

3. データ分析

対象者の人口統計学的特性と研究成果活用状況に関し、記述統計値を算出した。また、研究成果活用状況と概念枠組みが包含する学習状況に関わる12変数との関係探索に向け、 χ^2 検定、尤度比による変数増加法を適用した多重ロジスティック回帰分析を行なった。有意水準5%とした。統計処理には、統計解析プログラムSPSS 17.0J for

Windowsを用いた。

4. 倫理的配慮

国立国際医療センター倫理委員会の承認を得て、研究を実施した。また、対象者への研究協力依頼、質問紙配布に際し、研究の目的、方法、プライバシー保護等について文書により提示した。特に、調査紙への回答に、対象者の所属施設の所在地および性別を求めないことにより、認定看護師個人が特定される可能性を排除した。また、質問紙の回収には、対象者が返信用封筒を用いて個別に投函する方法を用い、これにより研究協力の任意性を保障した。

VI. 結果

質問紙を配布した認定看護師524名中478名（回収率91.2%）から回答を得、このうちの有効回答470名分を分析した。

1. 対象者の背景(表1)

対象者の認定看護分野は、がん性疼痛看護が75名（16.0%）と最も多く、次いで、感染管理が74名（15.8%）、緩和ケアとがん化学療法看護が各々73名（15.5%）、皮膚・排泄ケアが70名（15.1%）、救急看護が55名（11.7%）、集中ケアが48名（10.2%）、であった。勤務形態は、勤務時間の全てを認定看護師としての業務に従事する「専任」者が62名（13.2%）、勤務時間の80%以上を認定看護師としての業務に従事する「専任」者が53名（11.3%）、認定看護師としての業務が勤務時間の80%未満である「兼任」者が353名（75.1%）であった。認定看護師経験期間は、平均2.8年（SD2.3）、臨床経験年数は平均16.9年（SD5.4）、年齢は平均38.9歳（SD5.5）であった。職位、所属施設の種類、設置主体は様々であった。

2. 認定看護師の研究成果活用状況

対象者のうち、日頃の看護実践に研究成果を活用している者が182名（38.7%）、活用していない者が285名（60.6%）、不明3名（0.7%）であった。

3. 学習に関連する状況(表2)

対象者の1年間の学会参加状況は、0回から5回以上までと様々であった。また、1か月あたりの看護専門誌閲読状況も0冊から5冊以上までと多様であった。

4. 専門分野の活動に必要な能力(表3)

専門分野の活動に必要な能力のうち、認定看護分野の専門的知識に自信のある者が251名（53.4%）、文献検索・閲読能力に自信のある者が82名（17.4%）であった。

表1 対象者の背景

n =470

項目	度数 (%) または 平均 ± 標準偏差	項目	度数 (%) または 平均 ± 標準偏差
1. 認定看護分野		4. 施設の種類	
がん性疼痛看護	75名 (15.9)	一般病院	354名 (75.3)
感染管理	74名 (15.7)	特定機能病院	97名 (20.6)
緩和ケア	73名 (15.6)	訪問看護ステーション	8名 (1.7)
がん化学療法看護	73名 (15.6)	一般診療所	4名 (0.9)
皮膚・排泄ケア	71名 (15.1)	その他	6名 (1.3)
救急看護	55名 (11.7)	不明	1名 (0.2)
集中ケア	48名 (10.2)	5. 施設の設置主体	
不明	1名 (0.2)	公的医療機関	192名 (40.9)
2. 勤務形態		医療法人	143名 (30.4)
専従 ^a	62名 (13.2)	国	89名 (18.9)
専任 ^b	53名 (11.3)	社会保険関係団体	40名 (8.5)
兼任 ^c	353名 (75.1)	個人	3名 (0.6)
不明	2名 (0.4)	その他	2名 (0.4)
3. 職位		不明	1名 (0.2)
看護部長	1名 (0.2)	6. 認定看護師経験年数	2.8 ± 2.3
副看護部長	7名 (1.5)	7. 臨床経験年数	17 ± 5.4
師長	63名 (13.4)	8. 年齢	39 ± 5.5
副師長	86名 (18.3)		
主任	137名 (29.1)		
副主任	7名 (1.5)		
スタッフ看護師	154名 (32.8)		
その他	9名 (1.9)		
不明	6名 (1.3)		

注: ^a専従 勤務時間のすべてを認定看護師としての業務に従事
^b専任 勤務時間の80%以上を認定看護師としての業務に従事
^c兼任 認定看護師としての業務が勤務時間の80%未満

表2 学習に関連する状況

n =470

項目	度数 (%)
1. 年間学会参加状況	
5回以上	37 (7.9)
3～4回	200 (42.5)
1～2回	219 (46.6)
0回	13 (2.8)
不明	1 (0.2)
2. 月間看護専門誌閲読状況	
5冊以上	33 (7.0)
3～4冊	104 (22.1)
1～2冊	293 (62.3)
0冊	40 (8.5)

表3 専門分野の活動に必要な能力

n=470

項目	度数 (%)	項目	度数 (%)
1. 認定看護分野の専門的知識		6. 看護倫理に関する能力	
ととも／わりに自信がある	251 (53.4)	ととも／わりに自信がある	124 (26.4)
どちらともいえない	161 (34.3)	どちらともいえない	186 (39.6)
あまり／全く自信がない	58 (12.3)	あまり／全く自信がない	157 (33.4)
2. 認定看護分野の専門的技術		不明	3 (0.6)
ととも／わりに自信がある	240 (51.1)	7. 教育・指導能力	
どちらともいえない	164 (34.9)	ととも／わりに自信がある	182 (38.7)
あまり／全く自信がない	66 (14.0)	どちらともいえない	186 (39.6)
3. リーダーシップ能力		あまり／全く自信がない	101 (21.5)
ととも／わりに自信がある	191 (40.7)	不明	1 (0.2)
どちらともいえない	164 (34.9)	8. コンサルテーション能力	
あまり／全く自信がない	113 (24.0)	ととも／わりに自信がある	142 (30.2)
不明	2 (0.4)	どちらともいえない	193 (41.1)
4. 文献検索・閲読能力		あまり／全く自信がない	135 (28.7)
ととも／わりに自信がある	82 (17.4)	9. 看護管理に関する能力	
どちらともいえない	162 (34.5)	ととも／わりに自信がある	97 (20.6)
あまり／全く自信がない	226 (48.1)	どちらともいえない	146 (31.1)
5. 情報処理に関する能力		あまり／全く自信がない	226 (48.1)
ととも／わりに自信がある	98 (20.9)	不明	1 (0.2)
どちらともいえない	147 (31.3)	10. 対人関係・コミュニケーション能力	
あまり／全く自信がない	222 (47.2)	ととも／わりに自信がある	227 (48.3)
不明	3 (0.6)	どちらともいえない	176 (37.4)
		あまり／全く自信がない	67 (14.3)

5. 研究成果活用状況と学習状況との関係

認定看護師による日頃の看護実践への研究成果活用状況と学習状況との関係探索に向け χ^2 検定を行なった。その結果、研究成果活用状況は、学習状況に関わる12変数全てと統計学的に有意に関係していた($p<0.05$) (表4)。

そこで、研究成果活用状況にとって特に重要な変数の解明に向けて多重ロジスティック回帰分析を行なった。その結果、4変数に統計学的有意性を認めた(表5)。結果は、研究成果を活用している者が学会に年間複数回参加し、看護専門誌を毎月複数冊閲読しており、認定看護分野の専門的知識や文献検索・閲読能力に自信を持っていることを示した。

VII. 考 察

本研究の結果は、認定看護師の研究成果活用状況とそれに関係する学習状況との関係を明らかにした。

すなわち、結果は、対象となった認定看護師のうち、日頃の看護実践に研究成果を活用している者が39.0%に過ぎないことを明らかにした。看護職者にとって、研究成果の活用は、看護の質向上を図るために不可欠であり(舟島、

1995)、認定看護師には、根拠に基づく看護実践に対する期待が大きい。これは、日頃の看護実践への研究成果の活用が、看護職者にとって重要であり、認定看護師には特にそのことが期待されているにもかかわらず、行えていないことを表す。このことは、認定看護師にとって、研究成果活用の促進が課題であることを示唆する。また、これは、認定看護師個々が日頃の看護実践に研究成果を活用できていない要因を解明する必要性を示す。

結果は、研究成果を活用している者が学会に年間複数回参加し、看護専門誌を毎月複数冊閲読しており、認定看護分野の専門的知識や文献検索・閲読能力に自信を持っていることを示した。

看護師は、自主学習、院内研究、学会等の様々な学習機会を通して、活用してみたいと感じる研究成果に出会っていた(野本ら, 2004)。認定看護師にとっても、学会参加や看護専門誌の閲読は、認定看護師にとって看護実践に活用可能性を持つ研究成果に触れる機会となる。また、看護師は、活用しようとする研究を精読し、臨床の場への影響を考慮しながらその質を検討し、採否を決定していた(野本ら, 2004)。認定看護師にとって、専門的知識や文献検索・閲読能力は、関連する文献を検索し、読み、批評する

表4 研究成果活用状況と学習状況との関係

	学習状況	研究成果活用状況		p 値
		活用	未活用	
学会参加状況	5 回以上	25	12	0.001
	3～4 回	80	118	
	1～2 回	74	144	
	0 回	3	10	
看護専門誌閲読状況	5 冊以上	21	12	<0.001
	3～4 冊	57	46	
	1～2 冊	98	193	
	0 冊	6	34	
認定看護分野の専門的知識	自信がある	120	129	<0.001
	どちらともいえない	51	109	
	自信がない	11	47	
認定看護分野の専門的技術	自信がある	112	126	0.001
	どちらともいえない	54	109	
	自信がない	16	50	
リーダーシップ能力	自信がある	90	100	0.001
	どちらともいえない	64	98	
	自信がない	28	85	
文献検索・閲読能力	自信がある	52	30	<0.001
	どちらともいえない	70	89	
	自信がない	60	166	
情報処理に関する能力	自信がある	53	45	<0.001
	どちらともいえない	67	78	
	自信がない	62	159	
看護倫理に関する能力	自信がある	67	56	<0.001
	どちらともいえない	69	115	
	自信がない	45	112	
教育・指導能力	自信がある	85	96	<0.001
	どちらともいえない	78	106	
	自信がない	19	82	
コンサルテーション能力	自信がある	71	70	<0.001
	どちらともいえない	76	115	
	自信がない	35	100	
看護管理に関する能力	自信がある	54	43	0.001
	どちらともいえない	49	95	
	自信がない	78	147	
対人関係・ コミュニケーション能力	自信がある	100	126	0.018
	どちらともいえない	65	109	
	自信がない	17	50	

χ^2 検定
有意水準, $p < 0.05$

表5 研究成果活用状況と学習状況との関係

学習状況	偏回帰係数	p 値	オッズ比	オッズ比の 95%信頼区間
看護専門誌閲読状況	0.622	<0.001	1.862	1.384-2.505
文献検索・閲読能力	0.607	<0.001	1.835	1.385-2.431
学会参加状況	0.395	0.011	1.485	1.096-2.012
認定看護分野の専門的知識	0.038	0.020	1.463	1.063-2.014

多重ロジスティック回帰分析

有意水準, $p < 0.05$

モデル χ^2 検定, $p < 0.01$ 判別的中率 69.6%

という, 研究成果の看護実践への活用是非を検討するため
に不可欠な能力である。

さらに, 本研究の結果は, 研究成果活用状況と学会参加
回数, 看護専門誌閲読状況に統計学的に有意な関係がある
ことを示した。このことは, 認定看護師個々が, さらに積
極的に学会に参加し, 専門誌を閲読することにより, 日頃
の看護実践への研究成果活用促進につながることを示唆す
る。

加えて, 結果は, 対象となった認定看護師のうち, 文献
検索・閲読能力に自信のある者が 82 名 (17.4%), 認定看
護分野の専門的知識に自信のある者が 251 名 (53.4%) に
過ぎないことを明らかにした。「文献検索・閲読」, 「専門
的知識」は, 認定看護師の活動に必要な能力であり, 認定
看護師教育課程において学習する科目である。これらの結
果は, 対象者が 6 か月 600 時間をかけて資格取得に関わる
学習を行なったにも関わらず, 自己の能力に自信を持って
いない状況を示す。日頃の看護実践に研究成果を活用する
ためには, 研究論文を検索し, 閲読する能力, 関心を持っ
た研究成果を専門的知識に照らして検討する能力が不可欠
である。このことは, 文献検索・閲読能力や専門分野の知
識の向上が, 認定看護師個々の看護実践への研究成果活用
を推進するために重要であることを示唆する。

VIII. 結 論

1. 対象となった認定看護師のうち 60.6%が, 日頃の看護
実践に研究成果を活用していない。
2. 学会に参加し, 看護専門誌を閲読しており, 認定看護
分野の専門的知識や文献検索・閲読能力に自信を持って
いる認定看護師は, 日頃の看護実践に研究成果を活用して
いる。
3. 認定看護師による看護実践への研究成果の活用促進の
ため, 「専門的知識」や「文献検索・閲読能力」向上に向
けた状況の改善が必要である。

本研究の一部は, 第 41 回日本看護学会看護教育におい
て発表した。

■文 献

- Burns, N., Grove S.K. (2005) / 黒田裕子, 中木高夫, 小
田正枝, 逸見功訳 (2007). 看護研究入門－実施・
評価・活用－, エルゼビア・ジャパン, 東京.
舟島なをみ, 望月美知代 (1995). 看護における研究成
果の活用, *Quality Nursing*, 1(11), 10-16, 文光堂,
東京.
廣瀬千也子 (2008). 専門看護師・認定看護師における
現状と課題, *病院*, 67(4), 307-311.
清村紀子, 西阪和子 (2004). 臨床での研究成果活用に
関する調査研究, *日本看護研究学会雑誌*, 27(1),
59-72.
望月美知代 (1996). 臨床看護実践における研究成果活
用に関する研究－研究成果活用と看護婦の特性に焦
点をあてて－, *看護教育学研究*, 5(2), 13-15.
森岡清美, 塩原努, 本間康平 (2006). 新社会学辞典
「学習」の項, 160, 弘文堂, 東京.
日本看護協会 (2008a). 認定看護師登録者一覧, 日本看
護協会公式ホームページ, 2008.6.9 検索, [http://
www.nurse.or.jp/nursing/qualification/nintei/touroku.html](http://www.nurse.or.jp/nursing/qualification/nintei/touroku.html)
日本看護協会 (2008b). 認定看護師教育基準カリキュラ
ム, 日本看護協会公式ホームページ, 2008.7.3 検索
[http://www.nurse.or.jp/nursing/
qualification/nintei/pdf/
katudo.pdf](http://www.nurse.or.jp/nursing/qualification/nintei/pdf/katudo.pdf)
日本看護協会 (2010). 日本看護協会認定看護師規則,
日本看護協会公式ホームページ, 2010.7.1 検索
[http://www.nurse.or.jp/nursing/
qualification/howto/pdf/
censaisoku.pdf](http://www.nurse.or.jp/nursing/qualification/howto/pdf/censaisoku.pdf)
野本百合子, 舟島なをみ, 定廣和香子 (2004). 看護実
践場面における研究成果活用の概念化－病院に就業
する看護師の経験を通して－, *看護教育学研究*, 13
(1), 23-36.
尾形直美, 伊藤万亀子, 加美山幸, 鈴木千恵子, 松浦由

紀子, 田中真由美他 (2002). 総合病院看護職員における研究成果活用の実態調査, 第32回日本看護学会論文集 看護管理, 201-203.

Polit, D.F., & Hungler, B. P. (2004). *Nursing research: Principles and Methods* (7th ed.). Philadelphia: J. B. Lippincott.

【要旨】 研究目的は、認定看護師による日頃の看護実践における研究成果活用の現状およびその学習状況との関係を解明し、研究成果の活用促進に向けての課題を検討することである。7分野の認定看護師1,031名を対象に研究協力を依頼し、承諾を得た524名を対象に、郵送法による質問紙調査を行なった。質問紙には、日頃の看護実践への研究成果活用状況との関係を探索する12変数を調査するための質問項目を含めた。回収した質問紙478（回収率91.2%）のうち有効回答470を分析した。結果は、対象者のうち285名（60.6%）が、日頃の看護実践に研究成果を活用していないことを示した。また結果は、12変数のうち、認定看護分野の専門的知識、文献検索・閲読能力等が認定看護師の日頃の看護実践への研究成果活用状況に関係していることを示した。考察の結果は、認定看護師による日頃の看護実践への研究成果の活用を促進に向けては、専門的知識や文献検索・閲読能力向上に向けた状況の改善が必要であることを示唆した。

受付日 2010年9月3日 採用決定日 2010年12月16日